

磨けば光る！

小坂中学校三年 川井 すみれ

「個性とは何なのだろうか。」

皆さんは、「自由に円を描いて」と言われとき、どのような円を描くだろうか。色とりどりの円、歪んだ形の円、鉛筆で描いた円、大きな円、小さな円。たくさんの人が描けば描かれる円も異なり、そこに個性が生まれる。けれども、私は昔から「自由に表現」することが苦手だった。

小学校の頃、図工で「紙を破ってできた形から自由に想像して作品を作る。」という授業があった。その時私は、自由に想像するとはどうやればいいのかが分からず、なんとなく作りたいイメージをもち、それに合うように紙を破って作品を作った。「自由に想像して絵を描こう、自由な色で塗ってみよう。」と言われても、どうしたらいいか分からず、目にうつるそのままを描くことしかできなかった。私は昔から型にはまったことや、決まった作業などは得意だったが、自由に作品を作るということがよく分からず、うまくいかないことが多かった。周りを見ると仲間たちは感じたことをそれぞれの方法で表現していて、「自分には個性がないのではないか」と劣等感や焦りを感じることもあった。また、そのような経験を積むたびに悩むようになっていった。

「個性的な人」と聞くと、周りより目立つ特徴があったり、独自の感性をもったりする人を思い浮かべるのではないか。一方で「無個性な人」と聞くと何を思い浮かべるだろうか。周りに合わせるだけの人、平均的で目立たない人、オリジナリティがない人のことを指す言葉のように感じるかもしれない。しかし、私は「無個性」という言葉自体が思い込みに過ぎないのではないかと考えた。

私はクラシックバレエを習っている。舞台では、ソリストというソロで踊るダンサーと、コールドという大勢で踊るダンサーの役割がある。私は、コールドとして舞台に立つことが多い。自分にはソリストになるだけの実力や表現力もないことも分かっていたが、ソリストとして自由に踊りたいと思うこともあったため、コールドとしての立ち位置に少し不満を感じていた。だが、コールドとして舞台に立つ中で見えてきたことがある。コールドは、大勢で動きを合わせることで作品全体の雰囲気や、まとまりを作り出す重要な役割を担っている。目線や手足、列などを揃えながらも曲に合わせて表現をする力が求められる。普段のレッスンの積み重ねや、自分なりに曲を理解し、決まった動きの中で表現することが重要ということが分かった。それは一見個性がないように見える役割にも、自分らしさや表現を込めることができると気づいた。

私は、自分の個性とは何だろうと考えたとき、ソリストは個性があり、コールドは無個性のように、他人と比べて際立っている点を個性だと捉えていた。私はそんな思いを家族に相談した。家族に個性のある作品を作れないこと、「自由に」という表現が分からないことを伝えた。家族は意外にも「表現力をもっと育てるべきだ」とも、「どうしてわからないの」とも言わなかった。そればかりか、そのこと自体が、私の「大切な個性だ」と言ってくれた。その言葉に、私の心は救われた。他人と比較することで個性が現れたり、認められたりするようなものではないと知った。

だから、「個性は何だろう。」ともう一度考えたとき、人と比較するのではなく、広い視野で物事を捉えれば、今気づいていないよさや私の中に隠れている可能性を引き出せるかもしれない。自分をもっと磨いて自分の武器にするためには、経験を大切にしたり、多方面から物事を見たりする力を大切にしたい。

私は、一つの色・形・イメージで安易に個性を判断しない社会を作りたい。どんな人でも光るものがあると信じ、それを磨き続けられるような、そんな社会を目指したい。